第５学年　いのちの学習　指導案

平成 18 年 6 月 14 日（水）
授業者　　小北　茂子
男子 12 名　女子 12 名

１単元名　　**自分の生き物とのかかわりを見つめよう**

２目標　　学校の動物や教室の生き物とのかかわり方を劇に再構成し、それを見合う中で、「いのち」あるものとのよりよいかかわり方について考えるきっかけとしたい。

３　学習活動が生まれるまで

＜学習活動＞

自分が実際に、どのように生き物とかかわっているのかを「劇」という形に再構成してみる。それをお互いに見合うことで生き物とのかかわり方を振り返り、感じたり考えたりしたことを話し合い、どう関わっていくことが望ましいのかについて語り合う。そして、この問題はクラス内にとどまるものではなく、ペット等とのかかわりにまで波及するものであることを犬と人間の関係を例に気付かせたい。一方、生き物は昔から和歌にも詠まれてきたことを紹介し、人間は昔から自然の生き物との対話を楽しみながら生活してきたことに気付かせる。

＜教師の願い＞

願い（子どもとともに導きたい結論）を次のように考えた。

私たちが何気なく興味・関心を抱いていた生き物とのかかわりを見つめると、人間中心になっていることが多い。相手のことを考えながらかかわることの難しさは、人に対しても生き物に対しても同じである。が、いのちあるものとの対話なくして人は生きていけない。

＜生き物とのかかわりの実態＞

学級の子どもを見ていると、周囲の生き物と「積極的にかかわる」派と「かかわり方が表に出ない」派に分かれるように思う。前者の子どもたちは、①うさぎ、②メダカ、③カラスに強い関心を寄せている。一方、生き物にほとんど興味を示さないようにみえる子どももいる。

５年生になってからうさぎに急に関心を示し、朝から放課後までといっていいぐらいふれあっている女子が 4 名いる。だが、そのかかわり方はおままごとの延長のようなもので、草で料理したものを食べさせたり、わらと花で小屋を飾り付けしたりして楽しんでいる。教室で飼っているメダカとのかかわりは、どのクラスにも見られるものであり、卵の誕生に歓声を上げている。カラスを見ている子どもは、遠くからカラスの親子の様子を観察し記録に取っている。

4　学校研究に関わって

(1)「いのち」とのかかわりを、子どもたちの言語生活を再構成することで考える

日常の「そろそろ、水槽の水を交換する？」「これ、かびかな」「あ、カラスがえさを食べさせに来た」「朝から晩まで、うさぎのところに行く」という言動を劇という形にしてみる。その際、人間の言葉だけではなく、生き物の言葉も入れさせることで、人間中心のかかわりになっていないか考えさせたい。

(2)　自分の日常の言動を拾った簡単なシナリオを書き、劇を見合い、生き物とのかかわりという視点で感じたことを伝え合う

友達の劇を見て、かかわりに関して意見を述べ合う。

5　指導計画（4時間）

	学　習　活　動	評　　価
1・2	生き物とのかかわりを見つめ合うために、グループに分かれ劇を作る。 (1)劇を作る目的を知る。 (2)自分を振り返り、日常の言動を思い起こす。そして簡単なシナリオを作る。 (3)演じる練習をする。	○自分の生き物とのかかわりを振り返り、日常の言動からシナリオを書くことができる。
3 本時	劇「生き物とのかかわり」を見合い、感じたことや考えたことを伝え合う。日本人は昔から、生き物との対話を大切にし、楽しみながら生活してきたことを知る。 (1)感想を伝え合い、子どもたちなりの答えを出す。 (2)古くから人と共に生きてきた犬について、畑正憲『ムツゴロウ動物王国』から紹介する。 (3)『万葉集』、齋藤茂吉『あらたま』の生き物をテーマにした和歌を読み、生き物との対話を大事にする心の歴史性を知る。	○みんなの前で劇を演じ、友達の劇に対して感想を述べ、生き物とどう関わっていくかについて考えることができる。
4	自然の生き物をテーマにした「一行詩」を作る。ビオトープや自然に目にする生き物との対話をうながすために、形式こだわらない一行詩を書かせる。 (1)外に出て、生き物と対話するつもりで、一行詩を書く。	○空を飛んでいる鳥、地面をはう蟻、水面を上手に歩くアメンボなどを改めて見つめながら、それらに自分の思いを重ね、短い言葉にすることができる。

6　本時の展開

学　習　活　動	留意点＊　　評価□
1　今日の学習の目的をつかむ。 生き物とどうかかわるべきかを考えながら、劇を見て、感じたことを述べ合おう。	＊ただ、劇を見て、楽しむ学習ではないことを確認する。
2　劇をお互いに見て、考えを伝え合う。 (1)うさぎ（学校にいる１匹の）とのかかわり うさぎをかわいがっているというよりも、自分たちが楽しんでいる。うさぎが本当に食べたいえさとは？うさぎがあきて、誰もいかなくなったらうさぎはどう思うだろう。	＊それぞれの劇を通して、気づいてほしいかかわり方を教師も持って臨むけれども、私の考えを答えとすることにならないよう留意する。
(2)メダカやタニシとのかかわり 教室でよく見られる光景。(1)と同じで、結局は人間がその成長を楽しんでいる。相手のことを考え水槽の水を変えているのも、本当は迷惑？	＊自分から挙手できない子どもには、指名し、考えを引き出す。 ＊(1)や(2)のように、人間中心に動物と関わっている事例から、「ではなぜ、動物園があるのだろう」などと子どもが気付くように新たな視点を与えたい。
(3)カラスとのかかわり 教室の窓から、そっとその動きを見守っている。子どもにえさを運ぶ親の姿。「雨の日はどうするのかな」などと心配してみている。対話している。	
(4)あまり、生きものに関心がない 生き物に関心を示さず、毎日を送るのはさびしくないか。みんながメダカの誕生に沸いているとき、さめている。	□お互いのかかわりに対して、自分が感じたことを述べ合い、よりよいかかわり方について考えている。
3　生き物とのかかわりを見直すための2つの資料を見、かかわりのあるべき姿を探る。 (1)犬と人間のかかわり (2)和歌に見る生き物とのかかわり	＊『ムツゴロウ動物王国』より 日本人と犬はどのような付き合いをしてきたかを「犬と人」の歴史を遡る。 ＊『万葉集』、齋藤茂吉『あらたま』から、身の回りの生き物との対話から生まれた和歌を紹介する。
4　今日の学習の感想を書く。	

人と生きものとのかかわりを見つめて

日ごろの自分の行動言葉から

簡単な劇を作ろう

六月十二日

ナレーター1 五年一組にいるメダカは月子さんが四年生の時に持ってきたメダカです。五年生の生活が始まりました。

Aさん「にごってるー」

2日さん「そろそろそうじすらんないんねぇー？」

メダカA「苦たあ！」

B「早くそうじしてほしかったんだ」

ナレーター2 ぼくたちがそうじをしてきれいにしました。

問

ナレーター1 そして、五月二十四日に、メダカがたまごを産みました。

(今日)「あっ、たまごをうんだ」

ナレーター2 そして何度も何度産みました。

(四さん)「同じメダカがたまごを産んだのかな。」

Aさん「ちがうべー」

(ちさん)「たてずすけでほだいらばいうまねべー」

「ちゃんと云月ちゃんよ」

ナレーター 月子さんはたまごを産みつけるようにと草を持ってきてくれました。でも親メダカはたまごを食べてしまいます。だからメダカとたまごを別々にしました。

メダカ「ありがとうございます。」

メダカ「わしのまごができたわ」

メダカ「ただいま」

全員「おめでとう」

③メダカとのかかわり

人と生きものとのかかわりを見つめて

日ごろの自分の行動言葉から

簡単な劇を作ろう

六月十二日

(ア) 5年生になって五月くらいのことでカラスのひながいるんだよ

(イ) 「三年生の時からいたんだよ」

(ウ) 「えー元気付かなかった」

(エ) カラスの親はエサをさがしに行きひなにエサをやりました。

(オ) 「はやくエサくれ」

(カ) 「やっとエサが食べれたよ」

(キ) 親がエサをやりひなは喜びました。

(ク) 「ひなを守るために親はいかいします」

五十三日の夕時帰りの会でカラスの記録スタート

(ケ) 五月三十一日(水)・空が雲っている雨がふりそうで赤ちゃんは雨がかた時どうしているのだろう」

(コ) 「冷たい体がビショビショになる」

(サ) 親がカラスがかさ変わりになっているんだ」

(シ) 「六月二十日(火)」

(ス) 「ひなが飛ぼうとしている」

(セ) 「木に子が乗っている飛べるかな？」

(ソ) 「六月一日(木)」あまり動かない親はないと云だきっとあるていと云だったから旅に出たのかなあ」

(タ) 「もうえいえんにこないみたいだ飛んでるところを見てみたいな」

④カラスとのかかわり

人と生きものとのかかわりを見つめて

日ごろの自分の行動言葉から

簡単な劇を作ろう

六月十二日

ナレーターちゃん　五年生の四月ころから、うさぎのマリンの所に行くようになりました。3間おく授業が終ると急いでマリンの所へ行きました。

ちゃん「ねぇねぇマリンにパンジーくわせてみやぁ。」

ちゃん「あぁいいねぇ。」

ナレーターちゃん　私たちはスーさんからもらったパンジーをマリンに食べさせることにしました。

「マリンたくさんパンジーくってけがなぁ。」

ナレーターちゃん　マリンはパンジーを食べました。

マリンこ「これはめずらしいぞ。」

ナレーターちゃん　マリンこはたくさん食べてくれました。

ちゃん「けっこうくうじゃん。」

ちゃん「あぁ時間すぎてるかもしれないから見てくんなぁ。」

ちゃん「ちょん」……3間おく

ちゃん「ねぇ。時間なるよ行くべ。」

ナレーターちゃん　放課後のことです。

「マリンはダイエットさせっぺぇ。」

「いいよいいよぉ。」

ちゃん「えっ、ダイエットそれ。」

ナレーターちゃん　私たちはダイエットをさせることにしました。

ちゃん「マリンはだすべぇ。」

ちゃん「どこやってだべぇ。だれかもっいい人いだなぁ。」……こう間おく

ちゃん「あダンボールを入れるべぇ。」

ナレーターちゃん　私たちはマリンを段ボールに入れて、外に出しました。地面をあらせました。

マリンこ「あぁつかれた。ダイエットってこんなにつらかったんだぁ。」

ナレーターちゃん　五月になってみたかんじマリンがやせているようなにぇかしました。

おわり

① うさぎとのかかわり

人と生きものとのかかわりを見つめて

日ごろの自分の行動言葉から

簡単な劇を作ろう

六月十二日

ナ　5年生になってから朝からばんまでマリンのとこへ入行くようになりました。

人A　今日もえさをやりにきています。

人B「うわぁー朝あげたえさ、もう食べちゃったよ。」

人C「うわぁ大食いだねー。」

マ「うるさいな。」

ナ「じゃあエサあげよう。」

ナ　今日も人参をあげました。

そして次の日

マ「小屋だいぶよごれているね。」

ナ「そうだねあらかえよう。」

私たちはあらかえました。

マ「あぁすっキりいごこちいい。」

人「ねえマリンを外に出してみようよ。」

マ人B「こうしてマリンを外に出すことにしました。マリンをおいかけたりジャンプさせたりしました。」

マ「あーつかれた。」

マリンはあまり来くれずよたよたしていました。

このように私たちは朝からばんまでうさぎの世話をしていました。

② うさぎとのかかわり

人と生きものとのかかわりを見つめて

日ごろの自分の行動言葉から

簡単な劇を作ろう

六月十二日

メダカ

「わぁ、メダカが卵を産んだ。」（メダカのところへ）

「2秒まつ」

「私はみんながさわいでも行かなかった。」

「私たちも行かなかった。それはあまりきょうみがなかったからだ。」

カラス

「カラスも同じ。」

「カラスがいるよ。」

「まどの近くに行く。」

「2秒まつ」

「私は、ちょっとふりむいただけ」

「私たちも同じでちょっとふりむいただけ、だってみんなが見ていてくれると思ったから。」

うさぎ

「うさぎも同じ」

「マリこのところへ行こう。」

「2秒まつ」

「私は外にいくのがめんどくさくていやだった。」

「私たちも行ったことはあったけどあまりきょうみがなかったから。」

みんな

「これからは」

「生き物を大切にしたいです。」

以外

以外

♡ーあゆかちゃん　♂ー堅子ちゃん
△ー方由子　◇ー和幸ちゃん

⑤ あまり関心がなかった